

介護詠の今日性とその方法

—— 近刊歌集を中心として ——

Kaigo-Ei (Care Tanka) : Its Significance and Methods

中西 洋子

Yoko NAKANISHI

キーワード：現代短歌、介護詠、高齢化社会、表現方法

Key Words : Gendai-Tanka, Kaigo-Ei, aging society, expression of methods

はじめに

最近、いわゆる介護短歌という言葉およびその内容がテレビ、新聞、インターネットなどのメディアを通じて、当事者ばかりでなく一般にも広く関心を持たれるようになってきた。これについては既に触れたことがあるが、その作り手のほとんどが介護をする者と、されることをきっかけとして、短歌を自己表現の方法とするようになった人々であるところが共通していた。何かに表さずにはいられない、止むに止まれぬ思いの形が短歌という三十一音の伝統的な詩型^①だった点が興味深い。

高齢化社会に伴っての、こうした介護に関わる切実な問題はしか

し、右のようないわば短歌愛好者と呼ばれる人々のみではなかった。現在、一般に歌人といわれ、従って作歌を専らにし、合わせて短歌に関するさまざまな問題を考える人々——少なくとも文学意識を持った——もまた、時期を同じくして受け止め、とり組まざるを得ない現実^②に、当然のことではあるが直面していたのであった。たとえば、最近では短歌総合誌『短歌往来』（〇八年七月）に「介護のうたⅢ」と題する特集を組んでいるが、これに先立つ二回の同企画ととともに、その並々ならぬ問題意識のほどが伺われるのである。

なお、ここで「介護」という呼び方について付け加えておきたい。

この言葉の採用には社会福祉用語の影響が働いていることは確か

であろうし、現在ではすっかり一般化したものである。しかし、この項目が国語辞書に登場するのは、広辞苑の第三版発行、一九八三年（昭五八）からであるという。また、そのきっかけとなったのが、高齢者用おむつカバーを手がけた縫製会社の社長の発案による、「介護用おむつカバー」の商品名であった。そこには医療用、病人用などという言葉から受ける冷たい印象を避け、「介助する、護るという意味を込めて」という配慮がなされていたのであった。⁽¹⁾ 福祉用語として定着するにいたる背景には、このような介護分野の製品を手がける人々の工夫や努力が深く関与していたのである。

もう一つ、こうした介護に取材した歌の呼称について触れておきたい。メディアなどではすでに多く「介護短歌」と呼び慣わしている。ただ、この呼び方には一つの社会的現象といったニュアンスが読みとれよう。これに対して、短歌総合誌では「介護のうた」（介護うたと）⁽²⁾、または一般に「介護詠」と呼ばれており、意味としては大きな違いはなく、またどちらも明確な区別をして使っている訳ではない。本稿では、たとえば社会詠、自然詠などのように、短歌という詩型の中の一分野としてとらえたく、「介護詠」と呼ぶことにしたい。つまり、介護というきわめて今日的な素材が文学としての短歌表現にどのように詠まれているか、という意味についての呼び方である。

一

現在、多数の歌集が出版される中で、明らかに介護をテーマとす

る歌集、またはそれを中心に据えた内容の近刊歌集（〇四年より〇八年八月現在）を知るには、題名によって判断するものが圧倒的である。さもなくば、総合誌、結社誌などの書評や紹介欄で採り上げられたり、歌壇やマスコミで話題にされたりすることから、その手がかりを得るのが実情である。ここではそのようにして集めた中から発想、レトリックなど表現に工夫や新鮮味のあるもの、話題となった歌集などを幾つか選んだ。

最初に採り上げるのは、A黒崎善四郎歌集『介護5 妻の青春』（〇5・9角川書店）である。題名からも判るように、同書は全編、要介護5という重度の、記憶を喪失した妻を自宅で看とる日常と、その死後におよんで詠まれたもの。その中心をなすのが、「妻の霊前にて詠む」と副題をもつ「愛楽吟百四首詠（上・下）」であろう。妻の死後十五日間で詠んだと、あとがきにいう。

楽しみはベッドの妻が梅雨明けを感じるやうな顔を見るとき
楽しみはベッドの妻よこの朝もおむつのポリウムをじつかん
するとき

楽しみはベッドの妻の傍らの畳に蒲団敷きて寝るとき

右のように、百四首すべて「楽しみは……とき」の形に収められるのが大きな特徴であるが、題詞の説明にも示すように、これは幕末の歌人 橘曙覧^{たちばなあけみ}によってすでに試みられた方法であることはよく知られていよう。しかしこの場合、子ども達や身近の健やかなよろ

こび、うれしさをそのまま詠う、文字通りの「楽しみは」とは明らかに異なっている。

この作者の作は旧かな表現ながら、その発想、言葉遣いなど口語的で分かりやすく親しみやすい。ここには日常繰り返し返される介護の一こま一こまが、具体性を伴って展開されている。一首目の比喩は抒情的で美しく、実感をもつてひびくのである。つまり、快復のほとんど望まれない妻に対し、この初句をもつて明るく対しようとしたところに、作者のいい知れない悲しみを、われわれ読者は感じ取らずにはいられない。そのように歌いだすことで、作者自身が抱える深刻さを救おうとしたとも言えよう。百四首全首が必ずしも成功しているとは言いがたく、また、それぞれが総て初句のもつ「楽しみは」の意味にぴたり叶っているわけでもない。しかし全体からすれば、古典の手法が効果的に活かされた好例とみてよい作品群だろう。

なお同歌集には他に、「四十年（昔の妻は）」「あかねさす」「おほどかなる」「花冷えに」「介護5の」「持ち時間」「妻の死後」「最晩年」「妻居らざるや」（結句）など、「楽しみは」のバリエーションをなす、同じ初句（あるいは結句）に始まる（終わる）連作への追求が見られることも注目したい。

特急のスピードに乗れば介護より妻より逃るる悪気わるきがよぎる
逃亡といふにあらねどスピードに乗りたる心軽やかなるを

いかに妻への愛情が深くとも、またヘルパーの篤い支援があるうとも、介護は決してなまやさしいものではない。右のような、重病の妻から離れたひとときの、思わずもらした本音もまた、偽らざる心情に違いない。が、この類の作は非常に少なく、まして心の葛藤などがほとんど見られない点に、やや物足りなさを覚えるのは筆者だけだろうか。妻の死後、妻が書き残した三十数年間の卓上日誌や、ヘルパーによる介護日誌などにより、生前の妻の内面の苦悩を知り、それを理解してやれなかった悔いが、この歌集を編む動機の一つであったと、あとがきに言う。これを考え合わせると右の点も納得がいく。

最晩年妻をみつめるわれがゐるてみつめるのみの時が過ぎゆく

最晩年妻のかたへはわれひとり沈黙の夜が始まりにけり

これがわたしの骨壺ですかといぶかるや左様な顔の妻を空想す

先に触れた「最晩年」に始まる十三首の二つと妻の死後の一首。この世の残り時間の少なくなった妻から、一瞬たりとも目を離すまいと見守り続ける夫「われ」。それを見ているもう一人の客観的な「われ」がいる点に注目したい。すべて手を尽くした果ての、祈りに似た思いと侵しがい静かな時間が、下句「みつめるのみの：」からは伝わってくる。三首目も、特に上句に妻の死を悲しむ常套を捨てた発想が興味深く、悲しみを超えた悲しみが胸を打つ。こうしたところに作者の本領を見る思いがするのである。

紙幅の都合で次の機会に譲りたいが、第Ⅵ章から終章Ⅶにかけて長歌（反歌とも）十三首が収められており、病状の進行や日々の出来事、病床の妻に対する思いがこまやかに歌い、語られている。愛妻への鎮魂歌集としてしめくくりに対応しい歌群である。

なお、本歌集は介護に携わる一般の人々や短歌愛好家の話題を呼び、ラジオでも紹介された⁽⁵⁾。そうした人々にも影響を与え、力づけた歌集であったことも付記しておきたい。

二

二冊目としてB後藤由紀恵歌集『冷えゆく耳』（04・12ながらみ書房）を採り上げたい。三部から成る本歌集は、前半のⅠ部に認知症の祖母を歌った連作を中心として構成されているが、介護そのものをテーマとする意図のもとに編まれたものではないらしい。しかし家族（とくに母）や友人、恋、職場などが歌の対象にされている中で、全体を通して登場するのが祖母であり、印象的な歌も多いのである。あとがきによると「祖母というフィルターを通して女性が女性として生きる喜びや哀しみをわずかでも掬いとってきた」、と自らの歌をふり返って述べている。また「題材の一つとしての介護」とも作者はいう。真正面からとり組んだ介護や、介護という現実を歌うのでなく、その向こうに湛える抒情や思索の世界を歌う、というそのスタンスがこの作者の介護詠を特徴づけていると言えるだろう。

しんしんと耳が冷えゆく春の夜を祖母との旅のはじまりとする
海を産んだような顔をして祖母は眠る 春の真昼を晩年として
やがてわれを忘れてしまう祖母といて桜並木の先までを行く
終わりゆく祖母の時間の先にある死はやわらかく草の匂いが
人は決して子供に還らぬ大人用紙パンツはく骨ふとき脚
子を産みて育て働き痴れてゆく女とは淋しき脚に立つもの
冬の陽を浴びたる祖母よ大きな古鏡として何を映せる

認知症の祖母を看とるのは家族、主に母と孫娘である作者であるらしい。その看取りの夜を「祖母との旅のはじまり」、祖母のおだやかでゆつたりとした寝顔を「海を産んだような顔」、「われ」も家族も次第に忘れていく祖母への、心遣りのひとつとしての「桜並木の先までゆく」、その迎えるべき死について「やわらかく草の匂いが」、紙パンツをはかせる時の確かな思いを「人は決して子供に還らぬ」、などのようにとらえる。あるいはまた、冬の陽を浴びた祖母を「大きな古鏡」とも見る。こうした表現から窺い知るのには、やわらかくしなやかな感性と発想、リアルなまなざしである。介護や認知症という言葉から受ける従来の印象を払拭し、抒情豊かで美しい表現だ。

ぬぐのぬぐの呪文のように唱えては紙パンツぬがせる朝の儀式
ぞ

祖母には祖母の正論があり呉服屋へにんじん買いにゆくと
張る

便座カバー祖母のゆまりに汚れしを取りかえることも日常となる

「どうしてこう痛いんだろう」転倒をわすれし祖母のぐつくつと云う

口癖に「もう死ぬから」と言う祖母の黙々と食む飯のましろさ

このようにきれいごとではない介護の状況を具体的に詠んだ作も、当然見受けられる。ここでは「ぬぐのぬぐの」「どうしてこう痛いんだろう」「もう死ぬから」など、作者自身や祖母のせりふを用いた、口語調の親しみやすく、無駄のない言葉運びが効果を上げていく点も共通しているだろう。作者と同じ体験をもたなくとも共感を呼ぶに違いない。

みずからの母を叱りし母の背が日ごと尖りてゆくまでの鬱
糺したきことばかりなる冬の夜は祖母を捨てたしわれを捨てた
し

祖母の死を願いやまざる夜はただかく眼を閉じ眠るほかに
わが声と思えぬ声がまた祖母を責めてしまひぬ 鬱々と雨
祖母の死を予測しあいし母と娘は共犯者めく視線かわしぬ
惚けたる一人をめぐり議論するホームドラマのような明るさ
「デイサービス」日常語となり家族より家族の顔をした人が来る

先の見えない介護の日常にあつて、介護される者は勿論、介護する側の心の状態が常に愛情に充ち、穏やかであるとは限らない。むしろその折々で揺れ動き、微妙に変化しやすいのは誰しでもある。肉親であれば愛憎相半ばして一層複雑な心境ともなるだろう。右の作にはそうした日々の、われみずからを制しきれずに噴きだし、た叱正や責める言葉、祖母をいつそ捨ててしまいたいと思う遣り場のなさ、果てにはその死を予測し、願うなどなど、偽りのない心情の吐露と葛藤が作者だけでなく、母親のそれも交えてためらいなく詠出されている。表現としては、たとえば「鬱々と雨」は常套的なきらいがあるうし、五首目は具体性にやや欠けるかもしれない。冷酷とも思えるこのためらいのなさはしかし、読者にもどこか思いあたるふしがあると思わせ、納得させる力をもつ。人間心理の一面を突いているからだろう。

惚けた祖母の介護をどのようにしていくかは、周囲の家族にとつて深刻で重たく、目前に迫った問題である。後の二首では、作者自身も当事者の一人としてその議論に加わりながら、まるでホームドラマのような明るさだととらえるもう一つの眼。デイサービスのために祖母を迎えに来る人の、表情や祖母への接し方などに対して、家族よりも家族らしいという受けとり方。軽い表現をとりながら、どちらも皮肉めいた批評精神が顔をのぞかせる。

しかしながら、こうした作が先に掲げた抒情的、思索的な作と響きあいつつ、豊かな人間性を醸しだしてもいることに思いを致したい。

三

三冊目に採り上げるのは、C桑原正紀歌集『妻へ。千年待たむ』である。(07・5短歌研究社) 本歌集もAの場合と同様、夫が妻を看取る歌で占められているが、脳動脈瘤破裂で倒れた妻が二年後快復の兆しを見せ始めた、という点が大いに異なる。その経緯は巻頭に掲げた長歌「千年待たむ」によって語られており、歌集名はこの長歌のタイトルとともに、その反歌「吾妻はや目覚むるならば吾はもや千年待たむ二千年また」に因んだものであった。

妻よ、汝が命この世にとどまれど汝がたましひはいづこさまよふ

幾本もの管につながりしろじろと繭ごもる妻よ 羽化するか、せよ

耳もとで汝が名を呼べどしんとして古深井戸のごときその耳手の指が動いたといふそれだけであふるるものをもてあましたり
ためいきをひとつ吐くたび足首が地にしづみゆくやうなゆふぐれ

夜の雨を吸ふあぢさゐのほのじろし脳髓いくつ寄り合ふさまに

教職にある妻が倒れ入院した初期の作。症状の篤さを訴えるだけのような内容の作も散見するが、次第に深い嘆きが対象化され、表現として昇華させた成果を右に見ることが出来る。一首目は死者、

あるいは死に近づいた者への、古代より続く伝統的な招魂の歌。それを妻の病状と重ね、最初の連作に置いた点に工夫があろう。二首目の「しろじろと繭ごもる妻よ 羽化するか、せよ」からは悲痛な叫びが聞こえ、三首目「古深井戸のごときその耳」には絶望的なひびきが伝わってくる。五首目の、ため息を吐くたびに足首が「地にしづみゆくやうなゆふぐれ」とは優れた表現だ。四首目の、妻のわずかな動きに対する抑えがたくあふれ出るもの、六首目の紫陽花の描写など、いずれも感情を制御しつつ深い感情の吐露が伝わる。

もの言はぬ妻と語るを日課とし三つき経しころわれ少し老ゆ人間の尊厳といふ根本がわかっていない看護師がある

「おい、これは物じゃない、人間なんだ。もつと敬意を払つたらどうだ!」

いらいらと看護師を難じ来し夜を上目づかひに猫が寄りくる
しばらくを働かざれば炊飯器、オーブンなども不審がりぬん
ロックされし言語中枢あける鍵さがすごとくに話しかけやる

本歌集は文語体旧かな遣い表記を基本とするが、発想はおおむね口語的であり、表現も口語調を取る場合が少なくない。右は仕事(教職)を終えて病院に通うのが日課となった日々の詠である。一首目には愚痴ではない疲労感がただよう。二、三、四首は看護師への批判が詠まれる。二首目は具体的でないが、連作の一つとしては必要かもしれない。セリフだけの三首目には作者の不満がストレート

に叩きつけられており、口語使用の効いた一首といえる。四首目はその発想にユーモアがあり、ほっとさせられると同時に、妻のいない寂しさも伝わってくる。「妻の爪きりて帰りしその夜に二ひきの猫の爪もきりやる」というのもある。六首目は、妻に話しかける時のその比喩が病状に即しつつ、確かな説得性をもつ。

立たせむと妻の両脇に腕入れて持ち上げしとき「マッテ！」と言へり

今日妻がはつきりと言へりのたまへり「ソナニアセツテモイイコトナイノ」

せつかなわれを信用せぬならひ婚三十年のならひそのまま立つたまひつたりと胸と腰あはせ妻抱きてをり性愛ならで

後半には思わず噴きだすような作も見える。右は意識が少しもどり、言葉もわずかながら回復しつつある頃の、懸命なりハビリの様子を詠んだ作である。ここでも妻のセリフ、ことにかたかな表記が抜群の効果を上げている。真剣な夫と事情の理解出来ない妻とのずれが何とも可笑しい。ともすれば暗くなりがちなりハビリから、こうした可笑しさを生みだしていることは、介護詠において貴重な存在であろう。

肩書きのなくなりし妻の肩^へに葉を洩れきたる夕^{ゆう}光^{かげ}あそぶ

休職期間が過ぎ、退職せざるを得なくなった妻への、ねぎらいの心がしみじみとした巻末の一首である。介護を詠んだ作に占められている歌集であるが、同時にこれは熱い相聞歌集でもある。

四

四冊目にDさいとうなお歌集『逆光』（08・7北冬舎）を採り上げたい。本歌集は介護の歌を中心に編んだものではないが、全編にわたって基底をなす一つのテーマとして、重要な位置を占める歌群といつてよい。

あたたかき地球の端に腰かけて異なる空を母と仰ぎつ
草の芽のようにふくらむひかりあれ母の眠りをまた確かめて
繋がらぬ母への電話あおぞらを飲み干すように深呼吸せり
はるがすみ炭酸せんべい一枚をふつりふつりといつまでも噛む
いずこにも休み場所なき母ならん 震える音は夜の風だよ
山鳩の来ぬ日続きて雨水^{うすい}過ぐじんじんかんかん叩くもの欲し
いま母は森羅万象すべからく敵とみなして目を開かざる
火を守るごとく己の精神をまもるすべみな母より受けつ
いちめんのエノコログサが体内に揺れはじめ不覚、眠りに落ち
る

作者はパーキンソン病の進行する大阪の母親を、埼玉県と往き来しながらその最後まで看取って来た。ここには、いままで見て来た

ような介護や医療、病状に類する言葉はほとんど使われていない。病床の折々の母の表情や言葉、母への思いを詠んだものが多い。そのまなざしからは労りの心情が細やかに伝わって来るが、溺れやすい安易な感情の表白とは隔絶したものである。それは進行しつつある病状の現実を、確かに把握した上でそがれる注意深さを伴ったまなざしである。

また、作者にとつての母は肉親としての母親であることよりも、大先輩の歌人であり、看取りは後輩としての気持ちにかられたから、とあとがきに述べる。母に抱く負の感情や介護中の辛さなどがほとんど見られないのは、ここに理由があるだろうか。肉親としての母親への思いは言うまでもないが、このような距離を自分にはつきりと意識させることは、歌を詠む場合の一つの方法かもしれない。

右の作では「地球の端に腰かけて」「草の芽のようにふくらむひかり」「ふつりふつり」「じんじんかんかん」、あるいは「火を守ることく己の精神を守る」「エノコログサが体内に揺れはじめ」などの表現に独特の工夫が認められ、一首ごとの調べにきびきびとした緊張感を生みだしている点に注目したい。

かたはらに座りいつとき手を握るひいやり乾くカナカナの羽根
尊厳死するもさせるも荒縄にてたましい括る^{たぢかつ}手力^{ぢから}がいる

真夜中の幹伸びるさま恐ろしなど死にゆく前におもむろに言う
浅葱より藍へうつろう天空を漕ぎわたるべし単独行にて

生真面目な牧師が指を胸の辺に組ませて母の死は完結す
旅行者にすぎずとある日言いし声その母の子のわれも旅びと
卓灯を消して思えば母の死の夜よりねむりはすみやかに来る

右は死期の近づいた頃からその死と死後の作。「カナカナの羽根」「荒縄にてたましい括る」「単独行にて」など先の歌群同様、作者独自の発想と言葉の工夫が見てとれる。特に四首目、まさに死の直前を詠んだ作には限らない鎮魂の思いと、厳然とした死の事実とがなймаぜになって迫る力をもつ。五首目の、散文的でそつてなく、きつぱりと言いつつ切った結句からは、母の死の事実を自らに確認させ、長い介護生活にビリオドを打つことを暗示させている。口語的な発想も入れつつ、いずれも緩みのない調べを獲得した歌集である。

五

もう一つ、E日高堯子歌集『睡蓮記』（08・5短歌研究社）を採り上げておきたい。

現世にもどれぬままに現世にまだゐる母よ 遠いかななか
おかあさんまたねといへばものいはぬ母がベッドよりびえーと
啼きぬ

水中に睡蓮の茎ゆらゆらし このいまも母は管にて生きる
ぐつすりと眠つたまままで六月の空気の底に眠つたまままで

本歌集も介護詠を中心としたものではなく、むしろその占める歌数は少ない。その中より右に掲げたのは姑を看とる作である。病状は不明であるが、「植物性人間のやうにしづかなるししうど一本病院裏に」とあるのからほぼ見当がつけられよう。一首目の「遠いかなかな」には、意識の薄れた状態でこの世に永らえていることとよく響きあっており、二首目の「びえーと啼きぬ」のリアルな表現からは命があるということへの深い愛惜と悲哀感が迫る。三首目では睡蓮の茎の不安定さと母の命を繋ぐ管との響き合い、四首目では「ぐつすりと眠ったままで」の繰り返し「六月の空気の底」とともに、やり切れないさと無力感が吐き出され効果を上げている。いずれも命をみつめる確かな目の上に築かれた、表現のおもしろさに注目したい。

以上、五冊の歌集について介護詠を読み、その現状とともに従来には見られない発想や工夫を指摘して来た。ここではAとCが夫による妻の、Bが孫娘による祖母の、Dが娘による母の、Eが嫁による姑のそれぞれ介護である。病状もまた異なる。老老介護などは今日、身近なありふれたものになってきたが、介護する者とされる者との組み合わせは、現代の社会では勿論これに止まらず、さまざまな場合が見られよう。介護詠においてもまた同様の状況にあることは、刊行される歌集や月々の総合誌などからも明らかである。つまり、すでに触れたように、近刊歌集の中で採択しようとする条件にふさわしいと判断したのが、右の歌集だったということである。

病む者や老衰を看とり、快復へ向かって援助すること―介護（または看護）が、短歌の世界に急速にテーマ性を持つようになってきたのは、せいぜいここ十年ほどの現象である。それ以前は、普通の家庭において介護はきわめて当然の、家族―多くは妻や母、娘、姉妹など、多く女性の日常の仕事であり、ことさらに歌の素材として扱う意識も生まれにくかったようである。右の歌集の内、B、D、Eは女性歌人であるが、特にB、Dでは介護詠がその中心や土台となりながら、人生の営みの中でとらえようとしている。これだけの歌集で一概には言えないが、少なくともA、Cの男性歌人たちが扱うように介護の問題を取り扱わないのは、このことと今なお繋がる点があるかもしれない。⁷それが近年の高齢化、少子化が進むにつれ、あるいはライフスタイルの変化なども手伝って夫や父、息子たちも介護に関わらざるを得なくなり、あらためてそれと向き合うことになったと考えられるのである。今後の課題として考えてみようと思う。

さりながら、何よりも男女を問わず自分自身の問題として、生死の中で介護をとらえようとする姿勢が、先のどの歌集からもうかがわれるのはすでに見てきた通りである。また、介護することの現実や、その抱える心身のさまざまな苦しみを直視しながら、表現はそれを越えて掬いといった抒情や思索の世界に、文学としての短歌表現の在りようを追求しようとする姿勢も共通しているだろう。介護詠におけるこうした傾向は今後ますます開拓されていくに違いない。

なお、比較的早い時期にこうした介護に関した歌について、問題

提起をした評論として「二十一世紀と介護のうた―『介護百人一首』の試み」がある。⁽⁸⁾ 本稿ではこれに触れられなかったが、別の機会にあらためて考えてみたい。

【注】

- (1) 「介護短歌の世界とその表現」(『目白大学文学・言語学研究』第三号
○六年三月)。資料は「NHK福祉ネットワーク」に拠ったが、発行後
『NHK福祉ネットワーク介護百人一首』(○六年十一月NHK出版)が出
版された。
- (2) 短歌総合誌『短歌往来』(○二年十一月号、○三年五月号 ながらみ
書房)
- (3) 注(1)に同じ
- (4) 「朝日新聞」(○七年五月三十日付け夕刊)
- (5) 「介護の妻へ送る歌」(○五年十月十五日 ニッポン放送)
- (6) 『ミセス』(○六年三月号No.614 文化出版局)
- (7) 安森敏隆著『介護・男のうた365日』(○一年十一月新葉出版)、
安森芳子・安森敏隆著『介護・女と男の25章』(○二年一月京都修学
社) などもある。
- (8) 短歌総合誌『短歌往来』(安森敏隆 ○三年二月号 ながらみ書房)

Abstract

Authors of Kaigo-Ei are faced with problems of ailments, sickness, aging, and death in all their aspects, especially in today's aging society. Always taking care of one's parents or spouse, the 'uta' the poets sing appeal to us as actual experiences. This study, surveying through modern tanka anthologies, aims to unravel the significance of the theme, by illustrating the new methods of actual composition in scenes of caring and nursing.